

野木先生の懲戒解雇について―追加文

野木先生が中村誠先輩の判決文を持ち歩く理由の一つは、文中の「国士館大学体育学部教授大澤英雄」という部分にわざわざ~~~~線を引いてあるので分る通り、現大澤理事長が中村先輩の刺殺行為に加担していると言いたいのだろう。

大澤先生が理事長になった直後に出た怪文書の中に、大澤理事長が教唆した、という文言があったが正にこの判決文が元になっているのだろう。しかし、この文章の前後を読むと全くニュアンスは違う。

念の為、正確に記すと「安宅こそ国士館を乗っ取ろうとしているなどと言って田代を自己に同調させると共に、同じく大学時代の同級生で国士館大学体育学部教授大澤英雄らと謀って、同年六月初旬から中旬にかけて四回に渡り国士館に在職する同校卒業生を対象に演説会を開催し、……」と記してある。演説会をする為に協力したという事だろう。当時は好むと好まざるに拘らず、創立者の実子と婿の権力争いに全職員が巻き込まれていた時代だった。本当に教唆や事件関係者なら学内に残れる筈がない。

この時から現在に至るまで外部OBに一番接触があり、知名度があったのは良くも悪くも野木先生だった筈だ。今、大学の幹部になっている年代の人は皆、何らかの形で当時は翻弄されたろう。この判決文の中では野木先生の名も出てくるが、この中では安宅先生と親しい、となっている。それなら安宅先生事件後、梵天先生の側近になって行ったのは余りに節操がないではないか。

これこそ野木先生の真骨頂である。それまで学生部の職員だった野木先生は事件後武徳研究所の助教授という立場に変わり、実質は梵天先生の右腕であり、秘書兼用心棒的な立場だった事は誰もが認めていた事だ。だが殆どの人

の認識は、梵天総長とその右腕だった野木先生等のブラジルやエジプトへの進出や投資に対しての批判が噴出し、その急先鋒として安宅氏が担がれた格好になっていたと思う。当時、中村先輩と一番親しかったのは野木先生だった筈だ。もう三十年前の話を持ち出すのは止めた方がいい。忘れていた疵が疼くだけじゃないか。

暫らくは梵天先生時代が続くが、その後事件を切っ掛けに助成金がカットされ、梵天先生に逆風が吹き、文科省主導の国士館に新しい時代が来たのである。その後の野木先生は学内に仕事の場合は殆どなく、学外に仕事場を増やしていくのである。混乱な時代には野木先生のような存在も活躍の場は多くあろうが、落ち着いた時代や安定した組織になると、策略家と見られているような野木先生のいる場所はなくなるのである。自然淘汰されるのだ。それは本人が一番分っている筈だ。だからこそ今は外に仲間を求め外から攻めていたのではないか。知らない人を捲き込むのは止めた方がよい。

野木先生が本当にやりたいことは何なのかが全く見えない。何をしたいのか、誰を倒したいのか、もし大澤理事長を敵とするなら大澤理事長だけを徹底的に狙えばいい。だが佐伯氏が理事長時代には佐伯氏を、大澤氏が理事長になったら大澤氏をでは、単に嫉妬か自分が役職に就きたいだけに見られてしまうだろう。

野木先生は確かに非凡な才能がある。何かを創り上げる時、催しを主催する時の仕切りは天下一品である。しかし冷静に見ると一人で全ての役を熟すせいか、その後が続かない。恐らく今、心の底から本気で仲間と呼べるのは(支援しているのは)○○女史一人ではないか。残念である。

平成二十二年六月八日

敬 天 新 聞 社

社 主 白 倉 康 夫